

1. 教育の責任

私は、幼児保育学科に所属し、保育士や幼稚園教諭の免許取得を目指す、学生の教育・支援を行うことが私の教育の責任である。

私の担当している科目は、「子ども家庭福祉」(1年生前期)「社会的養護Ⅰ」(1年前期)「社会的養護Ⅱ」(2年生前期)「特別支援保育Ⅱ」(2年後期)「実習指導Ⅰ・Ⅱ」(1・2年)であり、保育士資格取得にあたって、必修科目である。これらの科目は、「社会福祉」「子ども家庭福祉」が根幹となり、「社会的養護」や「特別支援保育」など、専門的な援助に展開していく。そのため、知識を活用して、技術をもって、援助を展開するだけでなく、対人援助職としての基本姿勢を身に着けることが必要となる。そのため、①相手に寄り添うとはどういったことか、②子どもの権利、利用者の権利を守るということはどういうことかについて、対人援助に関わる専門職として考える力を身に着けてほしいと考えている。そのため、学生には、レポートやワークを通じて、自分の考えを表現できるようになることを求めている。

令和4年度からキャリア支援委員会と地域連携委員会に所属し、活動を行ってきた。委員会での活動を通じて、様々な園や就職した学生、地域で活動する方と関わる機会も多い。委員会活動で得た情報を学生に還元していく。また、アドバイザーとしてもこれまでの自身のキャリアから獲た知識や経験をより個々の学生に応じた形で還元していく。

2. 教育の理念

私が所属する幼児保育学科は、保育士、幼稚園教諭の資格取得を目指す学生が入学しており、卒業と同時に資格を活かして、キャリアをスタートする学生が多いと予想される。目まぐるしく変化する社会の中で、様々な背景をもった子どもたちが生活しており、学生に対しては、多様性を認められる、幅広い視野をもった子どもに関わる専門職になってほしいという願いがある。また、子どもの権利を守る、子どもの最善の利益を常に考えるためにも、学生自身が心身ともに健康で、「いい仕事」「いい援助」が継続できるような力を身に着けてほしいと考えている。

対人援助の仕事は、やりがいも多い反面、ストレスを感じることも多い。特に、子どもは、大人の事情に左右され、権利が侵害されることも多い。子どもの権利をまもるために、保護者や他機関、多職種とのかかわりの中で、負荷がかかる状況が続くこともあ

る。負荷をかけ続けることにより、「いい仕事」「いい援助」につながらず、結果、子どもの権利を侵害してしまう恐れもある。

そのため、学生に対しては、授業を通じ、専門職として、専門的知識・技術はもちろんのこと、自らの性格、強み、価値観、子どもとその家族、関係機関と関わるうえで、大事にしたいことについて、知る必要がある（自己覚知）。また、それを場面に応じて相手に伝え（自己開示）、援助を展開してけるような技術（ソーシャルワーク）が実践できるよう、知識・技術、自分が理想とする専門職像についても、ワークやレポートを通じ、ともに考えていきたい。

また、時代の変化とともに、コミュニケーションの取り方も変わっている。保育や教育の現場で求められるコミュニケーションスキルと学生がこれまで培ってきたコミュニケーションスキルのギャップが大きいと感じることが多い。演習や授業を通じて、声掛けに着目し、具体的な声掛けの方法、見守りの視点について、ともに考えながら、コミュニケーションスキルが少しでも向上するような取り組みを行いたい。

3. 教育の方法

これらの理念を達成するために、これまで、私が精神保健福祉士としての経験で得た知識や技術、考えを具体的な事例をあげて伝えている。これまで私は、医療機関未受診者を医療機関につなぐ支援、現状の社会福祉制度の中で支援に乗らない地域住民に対する支援、障害を持っている母親に対する就労の支援、若年層に対する就学・就職の支援、地域住民に対するメンタルヘルスの講座など、幅広い年齢や立場の利用者、支援者に関わり、支援を行ってきた。その経験の中で、例えば、子どもに関わる法律について伝えるとき、その制度が私たちの生活のどこに反映されているのか、具体的な事例を伝えることで、物語となり、想像しやすくなるためである。また、うまくいったことだけでなく、うまくいかなかったことも含め伝えることで、学生が考える様々な視点から考えられるような機会を提供している。

演習では、テキストの事例の説明をし、グループワーク、ペアワークなど、ワークを行う、動画を使って、当事者の考えに触れる機会を多く作っている。これは他者の考え、意見を聞くことで、共感することや自分と異なる考えに触れることを大切にしている。話し合った結果は、感想も含め、ワークシートに記入し、フィードバックを実施することで、より考えを深められるようにしている。

これから専門職として、実践を行うにあたり、記録はとても重要なものとなる。実践を振り返るだけでなく、他の職員に伝えるという役割も担うためである。そのため、書くことに対する抵抗を少しでもなくするため、ワークシートやレポートを使用して、まとめること、自分の意見を書くことを求めている。

4. 教育の効果

実践の結果、最初はレポートを書くことにあたって、テキストからの引用が多かった学生も、様々な視点から自分の考えを書くことができるようになっていた。また、ワークシートについても、ワークを重ねるごとに教科書の例だけではなく、具体的な声掛けや、関わり方についての記載が増えていった。フィードバックの際には、それらを積極的に伝え、フィードバックしながら、実際の現場での事例やプラスの評価を伝えたいうえで、もっと工夫できることをさらに考えるようにした。授業評価結果のアンケートからも具体的な事例を伝えていくことで、理解を促すことができることが分かった。

アンケートの結果から、予習復習に取る時間が少なかったことが分かったため、ワークシートの作成や具体的に事例の整理の仕方を伝え、予復習を促した。少しではあるが、予復習の時間が長くなったように思われる。しかし、アンケートの回答数がすくないこともあり、教育効果については図り切れていないと考えられる。教育の効果を知るためにも、アンケートへの回答を促していきたい。

また、あくまで体感ではあるが、実習の際に声かけを工夫し、うまくいったこと、いかなかったことについての相談をうける機会も多かったように感じる。学んだことを実践する姿勢がみられるようになったことも教育の効果として挙げたい。

5. 今後の目標

広義や学生へのフィードバックを通じ、自分の担当科目について、科目間の連続性を考えた構成に挑戦してみたいと考えていたが、昨年度以上に感染症関連の対応が増え、とりくむことができなかった。そのため、目標をそのまま継続したい。

昨年の目標は、担当している科目間で、共通する部分を洗い出し、年次を追うごとに内容がより実践的になるように工夫したい。子ども家庭福祉から、社会的養護Ⅰ・Ⅱ、特別支援保育Ⅱと展開するうえで、共通する内容が多々ある。知識と演習が現場での援助につながるように講義を展開するために、シラバスの見直しを実施する。

次に、課題の見直しである。現場で援助を展開するうえで、ベースとなる知識を身に着けることも重要であるが、小テストやレポートだけでは学生の理解を促す、定着させることは難しい。予習・復習の時間を効果的に活用できるような課題を設定したい。

最後に、教育の効果測定するためにも、学習ポートフォリオの活用はもちろんだが、一つ一つ、学生にわかりやすくフィードバックするためにも私自身が何を大事に対人援助の仕事をしてきたのか、研究や教育活動を通じて、表現できるようにしたい。